



ドストエフス  
キーの放った

ヤマダヒフミ

小説を書くという事はおそらく、想像されるよりもずっと、怖ろしい事なのだろうと僕は思う。何故なら、僕らがたとえ、あらゆる、小説を含む芸術を軽蔑し、それらを地面に叩き付け、ゴミ箱に投げ捨てたところで、僕達のその稚拙な動作の全てが、大芸術家の芸術の中において既に描かれているからだ。・・・しかも、それは主役ではない、せいぜい端役として、あるいは悪役として載っているのだ。

・・・例えば、ドストエフスキーは当時のロシアにおいて、左翼思想がどういう経路を辿り、終末へと至るかを描いた「悪霊」という小説を書いた。そこで、彼は当時の若い、頭脳の勝った知識人達の宿命を徹底して描いた。・・・彼らは地面と足が離れているが故に、地面に激突して死ぬのだろう。・・・もう一度、戻るためには、ラスコーリニコフのように大地に接吻しなくてはならない。

ところで、その後のロシアの現実は一体、どうなったか。レーニンが、トロツキーが現れ、最後にスターリンが現れた。スターリン政権下では、悪霊は発禁処分になったのかもしれないが、彼らはその書物の中味までは焼き払う事はできなかった。彼らは本そのものは廃棄する事に成功したのかもしれないが、その真実からは逃れられなかった。・・・だから、僕が言いたい事は、スタヴローギンとは正にスターリンではないのか、という事だ。

スタヴローギンが実際にスターリンに似ている、似ていないという些細な事を僕は言っているのではない。ドストエフスキーが、徹底的に洗練された形で、現代の最奥の病巣を一人の人物に結実して描いた以上、病理そのもののスターリンという人物は、勝手にドストエフスキーの作品の中の一登場人物に酷似するに至ったのではないか、という事だ。僕の言いたい事は。

スターリン政権下では多くの人々が死んだ。・・・あるいは、それは、スターリン政権下にしか成し遂げ得なかった進展もあったのかもしれないし、今でも、ロシア人の内、スターリンを応援する人は多いと聞く。・・・しかし、僕にとっての真実は、残念ながら、多くの人々がその政権下で亡くなったという事ではなく、スターリン的なものはドストエフスキーの手の平を決して超える事はなかったという事にある。彼は大勢の人を殺したのかもしれないが、しかし、彼は必然的に死よりも深いものを負って死ぬ事になったのではないか・・・。それはつまり、あの、恐るべき殺人を犯したラスコーリニコフが体験した、絶対的、存在的な孤独である。

正義を楯に人を殺す事はできる。人は、笑いながら犯す事ができるものである。何も考えないものが、社会からの命令だから仕方ないという事で、人を殺める。・・・彼に罪の意識は一切ない。・・・何故なら、彼は社会の命令に従っただけなだから。自分が悪いはずがあるのか。

自分達は正義の体現者である。・・・だが、無意識は反抗する。我々が頭脳を強度に駆使して、自分自身を征服しえたと思った瞬間、別の角度から現れた自分によって、自分はバラバラに切り裂かれる。スターリンは晩年、極度の人間恐怖に怯えていたという話を聞いた事がある。彼は自分の正義を信ずる事は最後までできたが、自分の恐怖がそれに背離する事はどうにもならなかった。彼は端的に言って、正義の神であり、執行者であったのかもしれないが、人間としての彼が彼自身に反抗したのだった。

ドストエフスキーが描いた現実はこの僕達にも通じる。僕達は自分を失っている。誰もがラスコーリニコフ的である。誰もが性格を紛失している。誰もが様々な衣装を着たり、着せたりする。イケメン、オタク、アラサー、ゆとり世代、ニコ厨、団塊の世代・・・実に様々なレッテルがあり、どれを身にまとうかが、どれを人に勝手にかぶせようが、全部、僕達の勝手だ。だが、忘れてはならない。ラスコーリニコフは信じる事を全てやめた事から始めた。そこに物語が生まれた。何かを信じている人間に物語が到来する事は決してないだろう。疑問を持たない者に答えがおとずれる事が決してないように。

現代という時代は、根本的にラスコーリニコフ的だと、僕は感じている。誰もが、地面に足をついていない。仮面をかぶれば、試験を突破し、良い会社に就職し、かわいい彼女(かっこいい彼氏)をゲットできるかもしれない。だが、もはや、地面に足をついていないのはこうした個人ばかりではない。社会全体が地面に足をついていない。嘘をつく事、綺麗そうな仮面をかぶること、仮面が破れればまた新しい仮面をかぶること――それが全てだ。そんな時代と社会に僕達は生きている。

僕達は罰を食らうだろう。おそらくは。僕達の罪と何か。それは罪に気付かなかったという罪だ。あらゆる感受性が剥奪されている。モニターを通した全ては美化されているが、現実の目は腐って、淀んでいる。幸福はいつもモニターの中、いつまで、芝居を演じているつもりか、僕たちは。芝居を現実だと誤認したまま。

さて、僕は――――いや、これ以上、僕は言う事はないだろう。僕はこれから――自分の仕事を粛々と進めていっただけだ。粛々と。

ドストエフスキーが放った矢は、今の僕達にも突き刺さっている。それを見ようとしなくても、それはしっかりと突き刺さっている。そして、容易には抜けないのだ。僕らがこれを一つの遺産とするか、それともそれを老いた者の単なるお節介とするか――それは、僕達のこれからの歩みが決めるだろう。おそらくは。